

第2部

我孫子市の平和事業

1. 繼續事業

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

我孫子市は、昭和60年12月3日に「平和都市」を宣言し、昭和61年に広島市から被爆した旧市庁舎の側壁と敷石を譲り受け、手賀沼公園内に「平和の記念碑」を建立しました。

その後、平和祈念式典の開催のほか、戦後50年、60年、65年の節目の年には記念事業を実施し、戦後60年にあたる平成17年から、被爆地への中学生代表の派遣事業を開始しました。

このように平和事業が推進されてきたなか、平成20年度には、我孫子市平和事業推進条例を制定し、我孫子市平和事業推進市民会議を設立して、平和事業に取り組んでいます。

平成27年は、戦後70年であり、我孫子市が平和都市を宣言してから30年の節目の年に当たるため、戦後70年・我孫子市平和都市宣言30年記念平和事業（以下「戦後70年事業」という。）として、毎年行っている平和事業を拡大して実施しました。

（1）中学生派遣事業

○広島派遣の目的

広島市平和記念式典（原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）への参列、原爆ドームや平和記念資料館などの被爆関連施設の見学を通じて、戦争や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを知り、派遣体験を活かして次の世代への継承に貢献してもらうとともに、今後の平和に関する学習の糧にする。

○広島派遣の内容

ヒロシマ青少年の集いへの参加、広島市平和記念式典への参列、原爆ドームや平和記念資料館等の被爆関連施設の見学など。

○派遣団員：市内中学生24名

被爆地の広島や長崎に中学生を派遣する事業は、戦後60年（平成17年度）からスタートし、24年度までは6名（各中学校から1名ずつ）、25年度からは倍の12名（各中学校から2名ずつ）を派遣しています。

27年度は戦後70年事業として、24名（各中学校から4名ずつ）を広島に派遣し、より多く若い世代に、戦争や原爆の悲惨さ、平和の大切さを学んでもらいました。

<平成27年度 広島派遣団員>

学 校 名	氏 名	
我孫子中学校	青木 貴音	大房 美涼
	山本 大晴	温井 芙美
久寺家中学校	松丸 高大	浅井 愛夏
	大橋 悠貴	塚原 愛
白山中学校	田神 迅人	有馬 頌子
	伊關 裕心	阿部 茉莉衣
湖北台中学校	丸澤 和晃	菅野 麗
	大塚 陸央	渡邊 みずき
湖北中学校	清水 嶺	早坂 旭慈
	須藤 慈英	柴田 光音
布佐中学校	藤井 翔太	竹内 梨紗
	大河原 良祐	伊藤 汐里



PHOTO : Takao Miyakaku “GROUND ZERO 平和の祈り 2015” より

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

○派遣前の活動：平成27年7月27日（金）

(1) 事前説明会
・派遣中学生・引率者の紹介
・派遣行程の説明、派遣における注意事項など
・団長、副団長の決定
(2) 事前学習会
・教育委員会指導課によるミニ講座
・我孫子市原爆被爆者の会による被爆体験講話
・意見交換
(3) 派遣中学生自己紹介と決意表明
(4) 市長、教育長からの激励の言葉
(5) 懇談



被爆体験講話の様子



市長から激励の言葉

○派遣日程：平成27年8月5日（水）～7日（金）

にち	派遣行程
8月5日（水）	○「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加
8月6日（木）	○「広島平和記念式典」に参列・献花 ○原爆の子の像への折り鶴奉納 ○原爆ドームの見学 ○本川小学校平和資料館の見学 ○佐々木祐滋さん※の路上ライブ見学 ○広島平和記念資料館の見学 ○とうろう流し
8月7日（金）	○「平和の灯」の採火 ○平和記念公園の見学 (ガイドボランティアによる説明つき)

※佐々木祐滋さん…原爆の子の像のモデルとなった佐々木禎子さんの甥で、シンガーソングライター。

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業



原爆ドーム前にて



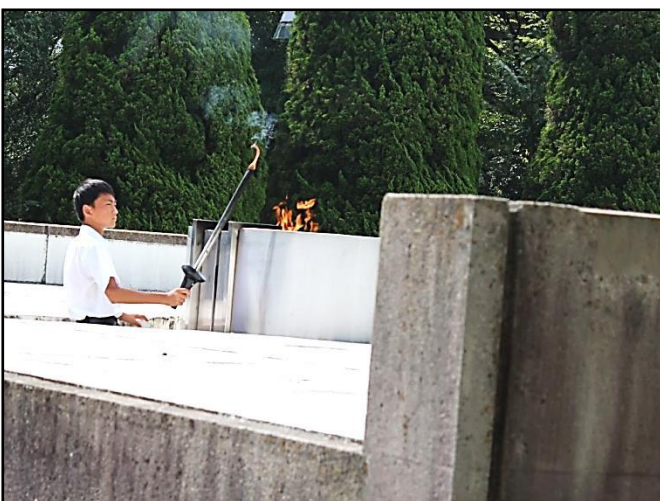
慰霊碑前にて（献花）



原爆の子の像前にて



広島平和記念資料館にて
（佐々木禎子さんが折った折り鶴を見学）



平和の灯の採火の様子



第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

◆ 平成27年度派遣中学生 広島派遣感想文

広島への派遣を終え、派遣された中学生から感想文を提出していただきました。被爆地の広島で学び・感じたこと、平和への思いが派遣中学生それぞれの言葉で綴られています。

平和とは何か

我孫子中学校 2年 青木 貴音

広島についた時、何気なく吸い込んだ空気は、我孫子と同じような味でした。他の国ではすこし違った、その国独特の味がします。千葉から広島までは、約850kmありますが、日本は日本で同じだと思いました。

駅から出てみると、そこは色々な高い建物が建ち並ぶ、都会のようでした。まるで70年前に、原爆が投下されたなんて、いくら想像しても、想像しきれない世界でした。

そこで平和とは何なのか。世界中の人が思う平和は、すべてが同じだとは思いません。自分はやはり、戦争をやめることが平和なのではないかと思います。しかし、戦争が始まってしまうのは喧嘩からだと思うので喧嘩をなくせばいい。それは難しいです。それじゃあ武器をなくせばいい。それも難しい。じゃあ核兵器をなくせばいい。それだって難しい。これらのことは、すべて時間をかけなければとてもすぐにはできない。

では、私たちに今何ができるのでしょうか。それは、後世へ語り継ぐことなのではないでしょうか。広島の実地の方たちの「核兵器をなくしたい」という声が、多く聞かれました。しかし、それは今の子供たちへ、次の世代へ、また次の世代へと、伝えていかなければそれは叶うことができません。なので子供たちに、興味を持ってもらうことが大切なのだと思います。

今の世の中は、子供達の意見を、親身になって聞いてもらってはいないと思います。将来を担うのは、今の子供達です。昭和20年の男子の平均寿命は、23.9歳。女子の平均寿命は、37.5歳でした。これでは、また戦争が起ってしまった時に、どうするのでしょうか。何も出来なくなってしまいます。

今回の統一地方選後半戦の62市長選の平均投票率は、50.53%だそうです。残りの半分の方たちは、何を考えていたのでしょうか。半数の人たちで日本を決めてしまっているのでしょうか。子供達に選挙権がないことで、どんどん関心が薄れてしまいます。

広島平和記念資料館に行って、一番印象に残っている展示物は、黒くこげてしまった弁当です。この当時のことを考えると、とてもつらくなります。他にも火傷を負ってしまった方の写真はとても悲惨でした。

今の私たちにでも戦争とは、したくないものであり、してはいけないものだと思います。なので、核兵器なんて、最も作ってはいけないものです。

本川小学校では、新しい校舎と共に、古い校舎の一部が建っていました。その一部は、資料館になっていました。そこの資料館へ入る時、一步一步が緊張するような、70年前の建物へ踏み込むのは、少し怖かったです。

真の平和を作るためには、この世界の戦争をなくし、核兵器の廃絶。後世へ戦争を伝え戦争を知ってもらおう。そして、二度と同じようなことが起こらないようにする。各国々が戦争を見直し、協力し合うことが必要なのではないのでしょうか。そのために私たちは、今被爆者の方々の話を聞き、忘れない、ことを続けていきたいと思います。

70年前にいた私達

我孫子中学校 2年 山本 大晴

「戦争の時代に生まれてなくてよかった。」これが、広島へ行く前の私の想いです。あの時代に生きていたら、兵として動員され、多くの確率で死んでしまいます。親と離れ、苦しい思いをするなんて嫌です。

しかし、広島へ行き、原爆の恐ろしさを目の当たりにした今、「生まれてなくてよかった。」などの思いなどなくなりました。そのようなことを思っていた自分が恥だと思いました。

私の心の変化は特に広島平和記念資料館で起こりました。たくさんの子供が

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

「熱い、熱い」と喚き、水も飲ませて貰えず、ただただ長々と続く目の前の道をよろよろと歩き続けた人を思うと、今私が暑ければクーラー、水が欲しければ水道、お腹が空けば冷蔵庫、私が当たり前に過ごしてきたことが、70年前は違ったことを知ると、それぞれに対する想いが変わってきました。それは70年後の私達にとっても他人事ではないでしょう。

私は広島へ行く前に、戦争に纏^{まつ}わる映画を見てきました。兵士の心境、巻き込まれ、殺される市民、人の死を知らない政府、しかし、私が見たのは、戦争という本の1ページの1行にしか当たりません。今、70年前に何が起こったのか知られているのは、本の半分にもいってないと思います。だから今もなお、戦争が行われているのです。

今、日本の中で「安保関連法案」が話題になっています。それは戦争関連法を改める「平和安全法整備法案」と共に反対されています。私も反対です。その理由は、安倍首相が安保法案について「もし、アメリカから要請があったら」という質問に安倍首相はハッキリ答えず、「戦争には巻き込まれません」と答えたのです。もし、絶対に大丈夫なのであれば、「アメリカからの要請は断ります」と答えるはずです。私は多分戦いに巻き込まれると思います。70年前の悲劇、もう一度繰り返してはいけません。戦後に政府は言ったはずです。

「ここに、原子爆弾によって亡くなった人々を心から追悼するとともに、誤った国策により、犠牲となった多くの人々に思いを致しながら、その惨禍を二度と繰り返すことがないよう、後代に語り継ぎ、広く内外へ伝え、一日も早く核兵器のない平和な世界を築くことを誓います」と。

しかし、私は最後の言葉に違和感がありました。「核兵器のない平和」では、核兵器がなければ平和と呼べるのだろうか？いえ、違います。核兵器がなくても、戦争は起きます。沢山の犠牲者が出ます。私は身近な争いから無くしていきたいです。例えば、国内でも起こる殺人、テロなど争って解決しようとする考えをなくしていきたいです。

私は広島へ行き、より深く、濃く、戦争について考えるきっかけとなりました。今の私達は何ができるか、何をすべきか考える世代です。多くの事を知り、実行しなければなりません。今年で戦後70年。そして、被爆者の平均寿命が

80歳になりました。私に何ができるのだろうか、または、まだはっきりしないが一つは決まっている。

「世界平和」だ！

たくさんの思いに触れた広島

我孫子中学校 2年 大房 美涼

私が広島に行き、最初に思ったことは、「全然知らなかった。」ということです。いくら事前に資料を読んでいたとしても、広島に行くのと行かないのでは、大きく違うと私は感じましたが、広島に行ってみないとわからないことを、今回、広島に行き、学ぶことができたと思います。

原爆の被害は、3つがからまり合い、大きくなりました。その3つとは、熱線・爆風・放射線です。一番ひどいことだと思ったのは、放射線です。放射線により、被爆した何年後かに、発病し、亡くなったり、苦しんだりする人がたくさんいるからです。原爆の子の像のモデルの、佐々木禎子さんも、放射線による、後障害こうしょうがいで苦しんだ一人です。私は平和記念資料館で、詳しい説明、映像を見ました。2歳で被爆し、1955年に、白血病と診断されました。それまですごく元気だったのに、急に、ということがとてもつらいし、核兵器の恐ろしさを強く感じます。また、当時、本当に折っていた千羽鶴の鶴が、展示してありました。この鶴から、懸命に生きようとしている姿が思い浮かび、胸が締めつけられました。禎子さんの未来を、核兵器が、いや、戦争がうばったのだと思うと、なんともいえない苦しい気持ちになります。資料館で見る前に、原爆の子の像を見た時と、資料館で見た後に、像を見た時とでは、明らかに印象が違いました。禎子さんの思いを思い浮かべながら、像を見ました。このように、亡くなった方一人一人に、物語やエピソードがあります。広島原爆による被害で亡くなった方は14万人。一言で14万人というと、すごい大きな数だなぁ、位にしか思いませんが、こうして一人一人に物語があったという事を知ると、すごくすごく多い、そして悲しい人数だと思います。私は広島に行き、

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

実際にその事実を目の当たりにしました。

原爆ドームや本川小学校では、被害の大きさ、爆風の威力を改めて目で見ることで実感しました。外壁が壊れていたり、枠組みがむき出しだったりしていて、当時の状況がどれだけ悲惨だったのかを教えてくださいました。このような壊れかけの建物は、そのままの形をずっと維持し続けるのはとても難しく、高度な技術が必要なにもかかわらず、70年たった今でも当時の状態のまま残されているのは、たくさんの人の、忘れてはいけない、次の世代へ伝えたい、という強い思いがあるからだと思います。

平和記念公園を案内して下さった方がおっしゃっていました。

「ひとごとだと思わないでほしい。今だって世界中に核兵器があるんだから」

この言葉を聞いて、正直はっとしました。今まで色々な思いに触れてきたけど、ひとごとと思っていなかっただろうかと。今はもう核兵器が落ちるわけないと思っていなかっただろうかと。私だけではありません。みなさんも、自分には関係ない、どうせ昔のことだと思っていませんか？この言葉は、とても深く重みのある言葉です。しかし、私は広島でたくさんのことを見てきて、少しは現実に起きたこととして、受け入れることが出来ました。一步、成長できた気がします。

被爆から70年たった今、被爆者の平均年齢が80歳を超えました。そのうえで、私達が自覚しなければいけないこと、それは私達の世代が、実際に被爆した方の話を聞くことができる最後の世代かもしれない、ということです。そして私は、広島に行き、話を聞くことができましたし、被爆したものや建物も見ることができました。この、今胸にある思いを詳しくわかりやすく説明することが、私の役目だと思います。まずは、自分から、そして自分の周りへの平和につながることをしていき、たくさんの人に戦争の恐ろしさ、核兵器の残酷さ、そして被爆された方またその遺族の思いを、知ってほしいと思います。

いつか、世界中にある核兵器が全て無くなることを願って、今あるこの日常に感謝して、生きていきたいと思います。

本当の平和が来る時

我孫子中学校 2年 温井 芙美

私は2015年度の我孫子市中学生広島派遣団として広島に行って、実際にあった原爆の被害について学ばせていただきました。この派遣を通して、戦争や核兵器の恐ろしさや残酷さを知りました。今まではテレビで戦争の番組や原爆のドラマや体験談などをやっているのと、何となく怖くてチャンネルを変えてしまっていました。でも、派遣から帰ってきてからは、そのような番組を進んで見て、学びたいと思うようになりました。

私には特に記憶に残った事が2つあります。まず1つは、資料館で見た、映像資料です。爆発で全身に大火傷を負い、肌はただれ、生死をさまよう中、母や父、家族や友人に会いたいと一心に願い叫びながら亡くなっていった方がいた事を知りました。もし自分が同じ状況にあったらと想像すると孤独で、つらくて、とても苦しいと思いました。こんな体験をした人がたくさんいたんだと分かり、怒りと悲しみで涙がこらえられなくなりました。あの日お弁当を楽しみに働きに出た人、庭で三輪車で遊んでいた子供、工場で働いていた人、一人ひとりに今の私達と同じような生活がありました。何の罪もないその人達から一瞬で命を奪った原爆は、何があっても許せないと思いました。そんなものは、地球上にあってはならないと思いました。

2つ目は、平和記念式典の時のことです。私の近くに外国の女の人がありました。広島平和の歌合唱の時に、その人は歌詞が分からなかったようで、隣にいた日本人の人に歌詞を見せてもらって必死に日本語で歌おうとしていました。そのように、平和を願い、犠牲者を追悼しようとする外国人の方の姿をたくさん見ました。また、資料館では、すごく体格が大きくて怖そうな外国の男の人がありました。いつの間にか気がついたらその人の近くにきてしまい、内心、怖いなぁ早く移動したい、と思っていました。でも気がつくとその人は、展示品を見ながら涙を流していました。そんな人達を見て、髪の色や目の色がちがう人、一見恐そうだからって、平和を願う気持ちはきっと自分達と一緒になんだと分かり、感動しました。そして、強い思いで原爆ドームの保存を決定させた一

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

人の少女のように、強く平和を願う人達が世界中から集まって一つになれば、きっと核兵器を撲滅させる事は不可能ではないのではないかと思います。

私は、この派遣に行く前は、私の周りの生活は安全に満ちていて、少しもこの平和をゆるがすものはないと思っていました。なぜなら、核兵器の存在を知らなかったからです。毎日家族や友人に囲まれ、楽しく生活する事が、いかに恵まれた環境であるかという事を知りました。しかし、この派遣を通して、本当の平和とは地球上から核兵器が消えて、罪のない人が無惨に亡くなる可能性が無くなった時にやってくるのだと思いました。それは、広島平和記念公園と手賀沼公園にある、平和の灯の火が消える時です。今、地球上には、このたくさんの命を脅かす核兵器が、最低でも16,300発あり、核兵器の所持を明らかにしていない国もあるといわれています。その核兵器の中には、一発で地球上生物すべてを滅亡させてしまう規模のものもあるそうです。世界中には、広島で原爆投下があった事や、核兵器の残酷さを知らない人がたくさんいるのではないかと思います。本当の平和を世界中の人達に知らせるには、より多くの人達が原爆の恐ろしさを学び、考え、撲滅への声を挙げていく必要があると思います。今私にできる事は、この派遣で学んできたものを、身近な友達や、地域の人達に伝えていく事だと思っています。また、人間だけでなく、他の何にも一切関係のない動物や植物たちの貴い命でさえ、私達人間のせいで原爆の被害を受けるという事も忘れてはいけないのではないかと私は思います。

平和への思い

久寺家中学校 2年 松丸 高大

ぼくたちは今、とても平和な世界に住んでいる、買い物に出かければ、流行りのデザインの服や小物などがあり、外食に行けば、とてもたくさんの美味しい食べ物があり、学校へ通って勉強や部活にはげみ、家に帰ると食事をしたり、おかしを食べたり、ゲームやテレビを見たりしています。しかし、今から70年前、8月6日午前8時15分、原子爆弾が落とされ、ヒロシマ市内にいた1

4万人の人が命を落としてしまいました。爆心地の近くの川へ行けば、やけどでひふがたれ下がり着ている服はボロボロで、顔のひふはなく誰なのかすら分からない人たちであふれていました。その人たちは、「早く死にたい、早く死にたい」としきりに叫んでいたそうです。

その時に生き残った人も、放射線や、熱線による後遺症により、今もなお苦しみ続けています。熱線により、着ていた着物の柄が体にやきついたり、放射線をあびて、吐き気や病気をわずらったりと、原爆の被害はとても恐ろしいものでした。

その中でも有名なのが、「サダコと折り鶴」です。これは、わずか2才で被爆し、原爆の子の像のモデルとなった人です。2歳で被爆をしても、とても元気で活発な少女に成長しました。しかし10年後、小学校6年生の時に白血病と診断されました。しかし彼女は、「生きたい」という気持ちを持って、折り鶴を作り始めます。しかし、願いは叶うこともなく、たくさんの折り鶴を残して、この世を去っていきました。

このようなことを、今回、広島へ行き、学ぶことができました。ぼくは、広島へ行き、平和の尊さ、原子爆弾の恐ろしさなど、たくさんのことを学ぶことができました。とくに、この3日間の広島派遣を通して強く感じたことは、「平和への思い」です。原子爆弾の唯一の被爆国である日本だからこそ、感じる事ができたのではないかと思います。平和への思い、核兵器の廃絶など、再び同じあやまちを、おかしてはいけないという思いが強くあるんだと思います。

今年で日本は戦後70年の節目の年を迎えています。この唯一の被爆国の日本であるからこそ言える、平和への祈り、平和への尊さ、被爆者や、その親族の人たちの声や、強い思いや、禎子さんの親族の人の声や、気持ちをつづった歌など、広島へ行き、原爆のことだけでなく、人々の願いや、平和に対する思いや尊さなども学ぶことができました。

ぼくは、この広島派遣で、原子爆弾の恐ろしさ、平和への思い、平和への尊さ、それを自分の中にとどめ、いつまでも大切にしていきたいと思います。

そして、3日間で学んだ平和への思い、原子爆弾の恐ろしさ、などを自分の手で次の世代に伝えていきたいと思います。初めは、小さなことかもしれない

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

けど、いつかそれが、リレーになって、平和への思いが、次から次へと、未来へつながっていくことを願いたいと思います。

今回の広島派遣を通して、このことをしっかりと次の世代につないでいきたいと思います。

広島への派遣を通して

久寺家中学校 2年 大橋 悠貴

今回の広島への派遣を通して、感じたことや考えさせられたことが多くありました。その中の一つは、「次の世代に戦争、原爆の恐ろしさと愚かさを伝える」ということです。

広島へ行く前の事前学習や現地に行ってから「青少年平和への集い」などでさまざまな被爆体験の証言を聞きましたが、戦後から70年が経ちどの方もご高齢になられていました。また、「数年後には実際に被爆を体験したことを話す人がいなくなってしまう。君達の世代が最後になるかもしれない」とおっしゃっていました。この言葉に自分自身とても重い責任があるのではないかと感じました。僕達の世代が次の世代、またその次の世代に、戦争、原爆の恐ろしさや愚かさを伝えていかなければ、日本はまた同じ過ちを繰り返してしまうかもしれないと思いました。また、日本だけが平和でも他国が核を開発、所有していたり、戦争をしていては本当の平和ではないと思います。だから、世界にもっともっと原爆の恐ろしさを発信していかなければいけないと思いました。それが世界で唯一の原爆による被爆を経験した国としての使命だと思います。

次に、僕が感じたことは、原爆による人体への被害は一時期だけでは済まされないという恐ろしさです。原爆投下直後に原爆の核分裂による4,000度を超える熱線によって焼かれてしまったことで亡くなった方々。風速推定440mの爆風によってガラスが割れ、建物が倒壊したことによりその下敷きになり亡くなられてしまった方々。それだけでも甚大な被害が出てしまいました。しかし、原爆はそれだけでなく放射線による被爆があり、白血病やがん、骨髄

異形成症候群などの死に関係する大きな病気の原因となってしまうこともありました。放射線は目で確認して避けることができないので、自分が病気になってからでないとわからないという恐ろしさもあるということも知りました。このように、原爆はその一時期だけの被害では終わりません。大きな外傷は負わないで一命は取り留めても被爆が原因で病気にかかり、命を落としてしまうと聞きました。そのように命をつないでも病気でその後亡くなってしまうということも知り、なんとも切ない気持ちになりました。例えば、佐々木禎子さんの場合、2歳で被爆し、その後は元気に過ごしてきたものの12歳のときに突然白血病にかかり、病気が発覚してから約11か月後に亡くなってしまいました。その入院生活の中で千羽鶴を折れば元気になれると信じ、1,000羽以上の鶴を折ったといわれています。禎子さんのように、原爆により突然日常生活が奪われてしまう方々が多くいたのです。もし、幸せな今の自分を何かによって奪われてしまったら、どれだけの悲しみなのだろうと思いました。そして、戦争や原爆が投下されたことによってあたりまえの日常が奪われてしまったということも知りました。

このように、今回の広島への派遣を通して、平和になるにはどうすれば良いのだろうかと考えました。戦争、原爆について多くのことを学んできました。世界が平和になるための第一歩は戦争をなくすことだと僕は思います。その平和を考えるシンボルになっているのは世界で唯一の被爆を経験した所である広島、長崎です。その広島、長崎から原爆の恐ろしさや愚かさを世界の方々に伝えてはいますが、未だに世界には多くの核兵器が開発、所有されています。だから、もっともっと世界の方々に原爆の恐ろしさや愚かさを具体的に知ってもらい、核兵器が一日でも早く世界からなくなってほしいと思いました。

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

伝えてゆくこと

久寺家中学校 2年 浅井 愛夏

私は、今回の広島派遣でこれから私たちのすべきことについて、たくさん考えさせられました。

広島に着いて一番初めに参加した「ヒロシマ青少年平和の集い」で、～伝えること～をテーマにしたワークショップをやって、少しの人でも考える場をもうけることでたくさんの意見が出るということ、そして、出た意見を実現させることが不可能ではないということがわかりました。

次の日の朝は「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」に参加しました。ここでは安倍総理がお話ししていた核兵器のない世の中について考えさせられました。現在地球上に約15,000個もの核兵器があると聞きたいへん驚きました。戦時中唯一の被爆国である日本が他の国に核兵器の恐ろしさを知ってもらえるよう努力が必要だと思いました。その後は原爆の子の像に行きました。原爆の子の像の後ろにはたくさんの千羽鶴があり、中には海外からのものもありました。後から聞いた話では昨年度までで広島市に保管されている折り鶴の数は約8,000トンにもおよぶそうです。それを聞いて私はとても嬉しく思いました。これからもたくさんの折り鶴が世界から集まってその折り鶴が平和を運んでくれることを願います。次に向かった爆心地から350メートル離れた本川小学校平和資料館では、被爆された方の娘さんが中心となりガイドを行っていました。娘さんから聞いた被爆体験はとてもつらいものでした。私はその話を聞いた時に今、目の前で行なっていることが、～伝えていくこと～の一つなのではないだろうかと思いました。こんな風に被爆された方の子孫や親せきから伝えていくことも一つの方法だと思います。そして、この方法をすでにいろんな場所で実演していたのが佐々木禎子さんの甥、佐々木祐滋さんでした。そう感じたのは彼の曲を聴いた時です。私は禎子さんの千羽鶴の話を聞いたとき禎子さんはきっと希望を胸に毎日鶴を折っていたのだと思いました。でも祐滋さんの歌を聴くとそんな様子はどこにもなく日に日に死に近づくと実感するというようなことが歌われ、曲の中で何度も「泣いて、泣いて」という言葉が使

われていて、気付けば私の体は全身に鳥肌が立っていました。そして、自分の今までの軽い考えがすごく恥ずかしくなりました。このように伝えていくことで被爆された方のつらさや苦しみをたくさんの人に知ってもらい原爆の恐ろしさも伝わりやすくなるのではないかと思います。2日目の最後に訪れたのは「広島平和記念資料館」です。およそ40もの展示品を音声ガイドと一緒にまわり、とにかくたくさんの被爆体験を知りました。普通ではありえないようなことが体に表れたり、顔のどこになにがあるのかわからない人がたくさんいたり聞くことは全て目をつぶりたくなるほどの残酷なことばかりでした。そして、資料館では熱線、爆風、放射線それぞれの被害の大きさや形も学ぶことができました。私は幼い頃一度この資料館に来たことがありました。でも、その時の記憶として残っているものはほとんどありません。だから、資料館を見学するにあたって原爆の恐ろしさ、そして、被爆して亡くなった方の思いを考えながらということが大切になってくると思います。

最終日は、平和の灯の分火を行いました。広島県が核兵器のない世の中を目指し「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」と設置されました。そして、その平和の灯を我孫子市が平和首長会議の分火事業として全国で初めて分け与えてもらえることとなり分火を行いました。私はそのことがとても嬉しく、早くこの火が消えることを我孫子市民で願うことができれば良いと思います。私たちはそのまま平和記念公園の見学をしました。ガイドさんの説明があった展示品はそんなに数はなかったけれど一つ一つにいろいろな思いがあり、それを伝えようとしているのがすごくわかりました。

私たちの世代は被爆された方からお話を聞くことのできる最後の世代だと言われています。そんな私たちが核兵器のない世の中を作るにあたってできることは～伝えていくこと～なのだと思います。被爆された方々の意志を受け継ぎそれをたくさんの人々に伝え、核兵器のない世の中を実現させこの世にいつか本当の平和が訪れることを願い続けたいです。私にとってこの3日間はとても充実したものとなり、これからの自分が目指すものが少し見えてきたと思います。

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

これからの平和

久寺家中学校 2年 塚原 愛

私は、8月5日から8月7日の3日間、広島へ行って、戦争や平和について、たくさんを感じました。

広島平和記念資料館では、被爆をしてやけどをおってしまった人の写真や、被爆してボロボロになってしまった衣服や靴、かばんなどの実物を見ました。原子爆弾は約3メートルでそれほど大きくはないのに、空中で爆発したときにはとても大きくなっていて、原子爆弾一つで約14万人もの人が亡くなったと知って、とても驚きました。原爆で亡くならなかった人も、けががずっと残っていたり、大切な家族を亡くしてしまったりしていて、とても気の毒だと思いました。

「青少年平和の集い」では、実際に戦争を経験した方々は、もう平均年齢80歳をこえていて直接話をうかがうのはだんだん難しくなっているが、これからどのように伝えるのか、グループごとに話し合いました。私たちのグループでは、テレビ、本、学校の授業など、たくさんの人々が協力しないと実行できないような案が多く出ましたが、戦争のおそろしさと平和の大切さをたくさんの人たちに伝えられるように、私に少しでもできることを見つけて、実行していきたいと思いました。

広島に原爆が落とされてからちょうど70年の8月6日には、元安川でとうろう流しをしました。とうろうには、一つのとうろうに4人ずつ、平和への願いなどを書きました。私は、戦争というものが地球から無くなって、平和が続くように願いました。日本から戦争をしなくても、もし外国から日本に戦争をしかけてきたとしたら、平和ではなくなってしまうし、日本だけに戦争がないよりも、地球全体から戦争がなくなって平和になった方が良いと思ったのでそう願いました。広島に行っている間に、私は何度か「地球には今もたくさん核兵器がある」と聞きました。いくら平和になってほしくても、核兵器もまだたくさんあるので簡単に平和にはならないと思うけれど、一人一人が少しでも平和のことについて考えて、少しでも平和になったらいいなと思いました。

また、みんながとうろうにかいた願いが全部叶うといいな、と思いました。

我孫子市にも、広島の平和の灯を少し分けてもらったので、これからもずっと我孫子市が平和であってほしいと思いました。

このように、私が広島で見たり聞いたりして感じてきたことをたくさんの人々に伝えて、平和について少しでも考えてもらい、これからずっと平和がつづいてほしいと思いました。また、私たちがいつもあたりまえのように食べたり、遊んだりしていることも戦時中にはできなかったことなので、あたりまえのことに感謝をしながら、生活していきたいと思いました。

平 和

白山中学校 2年 田神 迅人

「平和」とは、一言で言い表すことのできない、とても大切で、かけがえのないものだと思います。今回の派遣での「青少年平和の集い」「広島市平和記念式典」や本川小学校などの見学で、全員の方が「くりかえしてはいけない」と言いました。それはとても大事ですし、その通りだと思います。その中でも、「ローマ法王の平和アピール碑」の中の言葉に「戦争は人間のしわざです」というものがあります。この言葉を僕は、人間が起こした戦争なのだから、人間は戦争を止めること、やめることができるのだとも言っているように思いました。また、僕達に被爆体験証言を話してくださった、寺本さんは、この碑は肩をよせあっていると、話していました。実際に見て、この肩のように、日本と様々な国が、肩をよせあえるような、関係に少しでも近づけたらいいと思います。

ですが、そんな関係になるためには、今までのように、平和を訴え続ける必要があります。そして、この「訴える」という行動は、被爆された方々だけがすればいいわけではないと思います。なぜなら、国民として、伝えていかなければいけないからです。僕は、原爆ドームの下で、各国の旗、平和になるように願う旗を振らせていただきました。とてもいい経験になりましたが、この

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

ランティアに参加しているのは50～60歳の方々がとても多くて、若い方はそんなにいませんでした。ガイドしてくれる方も、「若い人にもっと原爆の事、戦争の事を聞いてほしい」と僕たちに話してくれました。やはり「若い力」というのは、大切に、求められている大事な力なので、僕たち派遣団を含む、我孫子市全ての中学生が「平和、原爆、戦争」などの一つでもいいから、興味をもって、伝えていってほしいと思います。

僕は、広島に行き、原爆には関係がないですが、一つだけ思ったことがあります。それは、外国から来られた方々の多さです。式典や資料館、記念公園などで、たくさんの外人の方を見ました。これは、広島で起きた事、戦争の事を、少しでも外国に伝えようと思ってきている人が増えたからではないかと思いました。ここからは勝手な想像ですが、外国からこられた方で、おりがみを買っているのを見ました。そのおりがみが鶴となって、世界で、広島のを伝えてくれるのではないかと考えました。

そして、この派遣で、一番大事なことを教えてくれた、原爆ドームの下で歌を歌ってくださった、佐々木祐滋さんの平和の訴えが、3日間で、一番心に残りました。あの歌を聞いて、少なくとも僕は感動したし、祐滋さんの歌を、もっといろんな人に聞かせてあげたいと思いました。また、伝えなければならぬと改めて思うことができました。

僕は、市の代表として、派遣に参加し、たくさんの事を学び、経験しました。でもそれで終わらせたらいけないと思います。伝える、そして、相手に伝わるまでが、今回の派遣の役割、そして意味だと思うので、学校などで平和を訴え続けます。

平和について僕が思うこと

白山中学校 2年 伊關 裕心

僕の周りの世界は、とても平和だと思う。好きなゲームができるし、好きなマンガも読めるし、バスケもできるし……何より安心して生きていられる。だ

が、今回の広島派遣で、70年前までは、今とは遠くかけ離れていて、特に原爆投下直後の広島は、まさに地獄のようだったことがわかった。辺りには、崩れた家の瓦礫、火傷をして様相が変わり果てた人々、そして黒焦げになった死体。被爆体験者の方のお話を聞いて、想像するだけで心が壊れてしまいそうだった。

何で、そのような地獄が生まれてしまったのか。何で、戦争は起こってしまったのか。とても難しい問題だと思う。多分、僕なんかは考えてわかるようなことではない。だが、わからなくても考えることはできる。その考えを周りの人と伝え合うだけでも、十分平和につながる道標となると思う。

日常生活の中で戦争を例えるなら、と聞かれると、真っ先に思い浮かぶのはけんかだ。確かに、戦うという意味では同じだと思う。だが、被爆者の方の話で「平和の原点は人と人が仲良くすることだ」という言葉が出た。「けんかするほど仲が良い」という言葉にもあるように、けんかする人たちは案外仲が良かったりする。戦争のように、家を燃やしたり、殺し合いをしようとはしないはずだ。いじめの方が、むしろ戦争に近いと思う。争いというよりは、巨大な力で弱い者をいじめる面は原爆投下や東京大空襲などに似ているものがあるのではないか。互いの国がいじめ合う。いじめられるのは、無理に戦地に駆り出された兵士や、罪のない国民なのだ。

僕の考える平和な国とは、戦争がない、周辺国との友好関係も築けている、安心して生きていられる国だ。広島市のとある橋の上で、とある人が歌っていた歌にこんなフレーズがある。

「この国は本当に平和なのだろうか。この国は本当に豊かなのだろうか。」

歩きながらたまたま耳に入った曲だが、心に響くものがあった。今、日本と中国や韓国など周辺国との関係は決して良いとは言えない。安全保障関連法案は、今後また日本に戦争の時代をもたらすかもしれない。僕は、この曲に歌われているように、戦争が終わってから70年経つ今も、日本は本当の意味で平和にはなっていないと思う。

この国を、この世界を平和にするには、僕達の若い世代が頑張らなくてはいけない。戦争体験を語り継ぐ。より若い子どもの世代に戦争の真実を伝えてい

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

く。だが、これらの取り組みよりも、日本の国民一人ひとりが戦争の真実を知り、平和について真剣に考えることが一番大切だと思う。

今回の広島派遣では、学校で習わなかったことをたくさん学べた。小学校、中学校の義務教育の中で、もっと戦争のことを教えていくべきだと思う。そして、もっと戦争について考えさせた方がいいと思う。戦争の現実をもっとたくさんの方が知れば、この国の国民性として、平和な人間性が定着していくのではないかと。そして、この世界は平和に一步でも近づけるのではないだろうか。世界が戦争を忘れてしまうと、取り返しのつかないことになってしまう。そうならないよう、世界が戦争を忘れてしまわないために、努力していきたい。

PEACE

白山中学校 2年 有馬 頌子

70年前の8月6日午前8時15分、広島の上空で原子爆弾がさく裂し、その年の末までに14万人もの尊い命が奪われました。そして、今も数多くの被爆者が後遺障害に苦しんでいます。

私は、我孫子市の代表として広島派遣に参加しました。被爆者から聞く被爆体験は教科書ではどれも学べないことばかりでとても生々しい話でした。あの日、きのご雲の下で何が起こったのでしょうか。「水の都」と呼ばれた広島は一瞬で破壊され地獄と化したのです。

私たちは、広島市平和記念式典に参列しました。色々な国の人々も参列していて、やはり世界中でも大きなできごとだったということをあらためて感じました。黙祷の時の鐘の音が、私の体の中まで響いたことを忘れません。

本川小学校は、原子爆弾投下の際、爆心地にもっとも近い学校として大きな被害を受けました。本川小学校平和資料館は、本川小学校の一部で原子爆弾の傷跡が残っています。巨大なパノラマや、被爆した物、被爆後の学校の様子などが展示してありました。学校は窓も無く、ただ曲がりくねった鉄の枠だけという状態で再開したそうです。今の私たちにはこんな状況など想像できません。

きれいな教室であたりまえに授業をうける。それは、“あたりまえ”ではないということに気付かされました。平和であるからこそ、安心して授業もうけられて、おいしい給食も食べられます。全てのことに感謝しなければならないと思いました。

広島平和記念資料館では、被爆人形を見ました。燃えさかる街の中をやけどで皮膚がたれさがり、両腕を突きだした親子がさまよう様子を表現していました。色々な実物の展示を見て、原子爆弾の恐ろしさがとてもよく分かりました。

元安川ではとうろう流しを体験しました。原子爆弾で傷ついた人々が水を求めて亡くなっていった元安川に平和への願いをこめたとうろうを流しました。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、被爆して亡くなった方々にお祈りする所です。爆心地からの風景がタイルでできていて、そのタイルは、犠牲者の数と同じ14万個といわれています。そして、過去にさかのぼる為時計と反対周りのスロープを下っていくなど様々な工夫がこらしてある造りの建物でした。

アメリカでは長い間、70年前の2つの原爆投下は、戦争終結を早め、失われたかもしれない多くの人命を救ったという理屈で、正しい行いだったと考える人が多かったと新聞で読みました。しかし、現在では、間違いだったと思う人が若い世代になるにつれ、増えていることに期待が持てました。被爆者の平均年齢が80歳を超え、高齢化が進んでいる今、私たちが目で見えてきたこと、感じたことを無駄にせず、伝えていかななくてはいけないと思います。

これからの日本は、親切心やおもてなしの気持ちなど、日本人が昔からもつ優しい心を大切にし、日本人の美しい心が世界に伝われば多くの国や人々と仲良くすることができ、平和につながるのではないかと思います。

戦争で失われたたくさんの犠牲者がいて、今の平和があるということを決して忘れてはなりません。核兵器がもたらす恐ろしさを知り、惨劇をもう二度と繰り返さない平和で、みんなが笑顔で過ごせる世の中になるように心から願います。私は与えられたこの命を大切にすることを誓います。

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

戦争とは

白山中学校 2年 阿部 茉莉衣

私は、広島派遣へ行って本当の戦争のこわさやおそろしさを学ぶことができました。私が広島へ行く前までに知っていたことは、一発の爆弾で多くの人々が亡くなり、たくさんの笑顔が消えていった・・・ということだけでした。なので、広島へ行ってたくさんのことを学んでそれを我孫子に持って帰ろう！家族や友達、先生にも学んだことを、おしえてあげよう！と思いました。

しかし、広島の様式典や平和の集い、平和記念資料館などに実際に足を踏み入れると、そこには言葉では表せないくらいの悲惨な光景をまのあたりにしました。「たった70年前に日本でこんなことが起きていたなんて・・・」と思うと胸がいっぱいです。なぜこんなことになったのか、罪のない人が亡くなるということに他国はどう思っているのかと、たくさん悲しみ、胸が痛くなる所がありました。

では、これが日本ではなく他国で起きたことだったら？日本はどうやって対応するのか、助けるのか、見捨てるのか・・・。この戦争は日本が関わっていて日本だからこそ原子爆弾を使った、他国ならもっと死者は少なかったはず。もう、原子爆弾を見たくない、悪夢を思い出したくない・・・そんな人は日本中にあと少ししかいません。だからこそ、私達が次世代へ継ぐ架け橋となれば、これから先戦争はなくなる、言葉だけで解決できると思います。

今、日本はとても平和で良い国だと思います。それをいつまで続けられるかは、わからないけど、みんなの笑顔がずっと続けば、戦争なんて起こらないし、平和になれると思います。平和イコール笑顔でつながっているわけではないけれど、笑顔でいれば、つらいこと、悲しいことがあってもなんとか乗り越えられるし、なによりみんなが笑顔でいると楽しいと思います。私は一日の生活の中で楽しいと思わなかった日は一日もありません。つらいこと、悲しいことがあっても、必ず楽しいと思う時、瞬間はある、そう思います。

もし、私がそこにいたら？と思うととても不安になります。家族は生きていたか、死んでしまっていたのか・・・。こわくてたまりません。たとえ生きて

いたとしても、家族が全員生きていないと死んでしまいたいと思う、生きていても死んだ方が良かったと思う、と考えます。

しかし、私は広島で家族が亡くなっても懸命に生きた人、本で自分をかばって父が亡くなってしまったけれどその分自分の命を大切に生きて残った人・・・たくさんの素晴らしい人々を目にしました。つねに考えることは、私が今、ここに生きているのも、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、たくさんの人が一人に一つしかない大切な命を受け継いでくれたからだ、ということです。こんなことを考えられたのは、この広島派遣があったからです。私が行ってなければあまり意識せずこれから生活していたと思います。

私が派遣を通じて学んだことは、戦争はいけないことだという形ばかりの意識付けではなく、実際に被害に遭われた方々の生の声、原爆ドームをはじめとした当時の品々を生で見て、戦争の悲惨さを身をもって知ることが出来たことでした。

70年前に実際に起きてしまった出来事、貴重な生の声を聞いた私に出来ることは、この事を風化させずに更に70年、次の世代に広く伝えて、二度とこのような事件を起こすことのないようにすることだと痛感しています。

戦争とは勝っても負けても誰も幸せにならない悲しい言葉だと思います。この言葉こそ風化させるべき、そのためにも生の声が聞ける、今が最後であり最高の機会だと思うので、これからも派遣を続けて、少しでも同じ気持ちになれる中学生を育てていくべきだと思いました。

広島派遣をして感じたこと

湖北台中学校 2年 丸澤 和晃

僕は我孫子市の中学校の代表として、8月の5、6、7日の間、広島へ派遣されました。

1日目、新幹線で広島へ行き、最初に「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加しました。ここではヒロシマに投下された原爆について学んだり、爆心地から

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

1 キロ離れた自宅で被爆した被爆者から体験話を聞いた後で、ワークショップを行い、原爆によっておきた被害をどのように周りに伝えていくかを考え合いました。原爆の威力や恐ろしさ、また原爆を投下したときの様子をくわしく知ることができましたし、戦争についてどう伝えていくか、あまり考えたことのないことをしっかり話し合い考えさせられるいい機会になりました。

2 日目、ホテルから平和記念公園へ行き、「広島市平和記念式典」に参加しました。式典に参加して広島市長や安倍総理大臣、ほかにもいろんな代表者の話を聞いて、広島を中心に核兵器廃絶と世界が平和になることの実現に向けて力を尽くされていることを強く実感することができました。式典が終わると、原爆の子の像や原爆ドーム、本川小学校を見学しました。原爆の子の像では、原爆の子の像のモデルである佐々木禎子さんが病気になってから治ると信じて折り続けたという折り鶴がたくさん地域でつくられ、奉納されていたのを見て、佐々木さんの思いがたくさんの人に伝わっていることをあらめて知ることができました。また、原爆ドームや本川小学校の見学をして、原爆によってボロボロになった建物や校舎を見て、とてつもない威力であったことが感じられました。午後になると次に広島平和記念資料館に行きました。ここではたくさん資料があり、知らなかったことを次々と知ることができました。また写真の資料のなかには、ガラスが体全体にささっている人、体が熱線によりぐちゃぐちゃになっている人など、とてもひどい怪我をしている人の写真が数多くあり、原爆の恐ろしさを強く感じました。夕方からは、自分の平和への思いを書いたとうろう流しを行いました。

3 日目は、最初に平和記念公園内にある平和の灯の分火を行いました。8月15日に我孫子市でも新しく平和の灯ができ、火をつけることになっているので、核兵器がなくなるまで燃え続けてほしいと思いました。この後、平和記念公園内の見学、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の見学を行いました。平和記念公園の見学では、ガイドさんといっしょに平和の鐘や供養塔などの見学をしました。ガイドさんにくわしくいろいろなことを説明していただき、ガイドさんが僕たちにいろいろなことを知ってほしいという気持ちが強く伝わってきました。国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、原爆によって亡くなった人

についてや被爆者の話について聞いたりしました。ここでは原爆によって亡くなった人は日本人だけでなく、アメリカ人など外国の人もいたことを知り、アメリカは自分の国の人がいたのに原爆を投下したことを知り、とてもひどいものだと思います。

この3日間で、戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさをより知ることができたし、平和の尊さを考えるととてもいい機会だったと思います。今回学んだことを、これからは自分の周りの人達にたくさん伝えていき、核兵器のない平和な世の中にしていきたいと思います。

原爆と向き合って

湖北台中学校 2年 大塚 陸央

僕は広島に行き、原爆と向きあい、いろんなことを学びました。

ヒロシマ青少年平和の集いでは、自分で平和について考えることができました。宇佐川弘子さんや寺本貴司さんからは、原爆の恐ろしさを学びました。アメリカは原爆の効果を確認したりするために、日本に原爆をおとすなんて本当に人間のやっつけていいことなのかと思いました。日本ではたくさんの方が苦しもだえて死んだのに、平気な顔をしているのはおかしいと思いました。ワークショップでは、僕たちは「未来に真実を伝えていくには」というテーマで考えました。見ず知らずの人たちと意見をだしあい、まとめるのは大変でした。でもいろんな意見が出て勉強になりました。このように、まず僕たちが協力することができれば、協力の輪は広がっていき、世界中が協力する日が訪れると思いました。

広島市平和記念式典の平和宣言などはすごいと思いました。話を聞いて、日本は昔からずっと核兵器廃絶を求めてきたんだと思いました。2020年までにこの世から核兵器が消えればよいと思います。そのためには僕たちのような子どもも核兵器廃絶を訴えるべきかなと思いました。広島市長もおっしゃっていたように、歴史の証人として改めて原爆被害の実相を受け止め、被爆者の思

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

いを噛みしめたいです。また、平和への誓いを聞いて、僕は小さな平和をたくさん作っていきたくて思いました。

本川小学校では、原爆が落ちた後の広島の様子や原爆によって形が変わってしまったものなどをみました。原爆が落ちた後の広島の模型では建物はほとんどくずれていました。そこで火事が起こり、皮膚がむけている人が大勢いたと思うと今もぞっとします。本川小学校にはとけたガラスびんがおいてありました。それは全く形がびんとはちがっていてびっくりすると共に、原爆の恐ろしさを改めて感じました。

広島平和記念資料館では、禎子さんの折り鶴が印象的でした。折り鶴はとても小さくてきれいでした。その折り鶴には禎子さんの病気の快復の思いがこめられていたんだと思いました。また、禎子さんの甥の祐滋さんは歌で平和になってほしいという気持ちを伝えていました。僕も平和への願いをどんな形でもいいので伝えたいと思いました。また、核兵器の模型の展示もありました。そこでは、1kgにも満たないウランの核分裂によって、5000℃もの熱、風速440mの風、そしてたくさんの放射線が広がったと書いてありました。たった1発で都市を消滅させる仕組みを知ってさらに原爆の恐ろしさを知りました。

とうろう流しでは、たくさんとうろうを見ました。とうろうの数以上の人たちが、原爆によって死んだ人に祈りをささげている人だと思いました。また、僕もとうろうに願いを書き、被爆者へ祈りをささげました。

広島平和記念公園の見学では、原爆では外国の人もたくさん死んだことがわかりました。公園の中には朝鮮半島の人々の墓があって原爆によって外国人もたくさん死んでしまったんだと思いました。学徒動員の慰霊碑は、広島で働いていた人などの墓で鳩の小さな像もありました。他にも平和の鐘は原子爆弾のマークがあり、そこをつくことによって原子爆弾がこの世から消えることを願っていると聞きました。また、原爆が爆発した方向を向いている8時15分を指す時計がありました。その周りには被爆瓦がおいてあり、とても印象深いと思いました。

原爆ドームはもともと産業奨励館と言うりっぱな建物で、その写真を見ました。すると、今の原爆ドームとは全くちがいで、とても驚きました。原爆ドーム

は原爆の恐ろしさを語る貴重なものだと思います。

僕はこの3日間を通して、原爆と向きあいいろんなことを学びました。僕たちがあたりまえのように勉強したり、遊んだり、食べたりできるのは、すべて平和であるからだということを実感しました。また、原爆の恐ろしさを語る人や、平和を願う人をたくさん見れました。これから僕はこの体験を忘れず、もっといろんなことを学び未来へ伝えていきたい。そして、いつか原爆がなくなり、世界に真の平和が訪れることを願って生きていきたい。

平和について

湖北台中学校 2年 菅野 麗

今回の派遣では、テレビや映画で見るとは違う、原爆による被害の実体、そのままの姿を知ることができた。その中で特に私の印象に残ったことは2つある。

1つ目は、たくさんの方が原爆に苦しめられたからこそ、たくさんのお母さんがあるということだ。直接被爆し亡くなった人、生き延びた人、遺族の方々など、色々な立場の方がそれぞれの思いを背負って生きていたということに、私は改めて衝撃を受けた。1日目、最初の活動である「ヒロシマ青少年平和の集い」に参加したとき、各グループに中高生のボランティアの方がついて下さった。私のグループを担当してくれた中村さんは、「私たちのような次の世代の学生達が、この日本を平和にしていかなければいけない」と言っていた。私と歳が近い人が、過去の過ちを繰り返すわけにはいかない、未来の日本の責任は私達にある、と行動していることに驚き、また私達もその学生であり、日本の未来を担うものとしての自覚をもたなければいけない、と再確認させられた。2日目に「原爆の子の像」を見たとき、奉納されていたたくさんのお母さんや折鶴や碑から、佐々木禎子さんの思いが70年経った今でも人を動かしていることを知った。なぜ70年も禎子さんの思いは受け継がれてきたのだろうか。それは、^{よわい}年齢問わずか12歳であった禎子さんが、「病気を治したい」という一つの願いのもと、少

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

ない余命を懸けて鶴を折り続けたという意思の強さに心打たれた人がたくさんいたからではないだろうか。被爆し亡くなった一人ひとりが禎子さんのように思いを抱えて死んでいったのかと思うと、さぞ無念だったろうと不憫ふびんでならない。3日目の「平和記念公園」や「国立広島原爆死没者追悼平和祈念館」の見学では、ボランティアガイドさんに案内していただいた。そのときガイドさんは繰り返し、「実際に被爆した人達にとっては、原爆は忘れない記憶かもしれない。それでもなかったことにはできないから、君達のような若い人が、少しでも多く広島に来たり、広島の話を知ったりして、原爆の悲惨さ、非人道さを後世に伝えてほしい。そして、戦争のない平和な世界をつかってほしい。」と言っていた。ガイドさんの話によると、原爆の爆発地点にほど近いところで奇跡的に生き延びた人達の殆どが、メディアへの露出はしないのだという。しかし、「もう忘れない、思い出したくない。」と思っている人の中で、「生き残ってしまった私には、原爆のことを伝える義務がある。」と取材に応じている人がいるのも事実だ。私は、そういった人達からもっと学んでいくことがあると思った。

2つ目は、何と言っても原爆の悲惨さである。2日目は2つの資料館の見学をした。本川小学校平和資料館は、実際に被爆した建物を残して資料館にしたもので、壁に黒い煙の跡が付いていたり、ドア枠が黒く焼け焦げていたり、生々しく原爆の威力が凄まじかったかを物語っていた。もう1つの資料館、平和記念資料館は、たくさんの展示物があり、人も多くいた。外国人の方もいて、国内外からの注目度の高さを感じた。まず入って最初に目についたのが、被爆者を再現した3体の人形だ。あの場では、誰もが足を止めていたと思う。私も心臓の動悸を感じた。文章では伝えられない、虚ろな目、焼け爛れた皮膚、血まみれの手足。今思い出しても血の気が引くような人形だった。百聞は一見に如かず。正にその通りだと感じた。原爆が落ちた8時15分で止まった懐中時計や、硝子が食い込んだ鉄の扉。ケロイドにより皮膚が腫れ上がった女性や、顔に紫斑がたくさんできた男性。中でも衝撃的だったのが、「人影の石」だ。人がいなかったところは熱線により白くなり、人が座っていて影になっていたところは焼けず、色がそのまま残ったという石で、原爆が一瞬にして多くの命を奪

ったということがよくわかる展示物だった。見ていて辛くなるような凄惨な展示物ばかりだったが、例えどんなに惨いものでも、目を背けずに向き合わなければ、これからのことは考えていけないだろう。だから、見る勇気がないという人も、どうか1回でいいから向き合う努力をしてみしてほしい。

私は、数少ない原爆の事実を教えてください人達に敬意を払い、原爆について知り、理解し、これからもっと平和な世界をつくっていかねばいけないと思った。なぜなら、そうできるのは自分達若い世代だけだからだ。まだ広島に行ったことがないという人が多いと思うが、まずは小さなことでもいいから、広島について知ることから始めるべきだと思う。私達は原爆や戦争のことを直接聞ける最後の世代といわれている。知ることができるうちにたくさんを知り、聞けるうちにたくさんを聞く。そうやって、次へ次へと繋げていくことで、今よりもっと平和な世界を築けるだろう。

戦争と平和について学んだこと

湖北台中学校 2年 渡邊 みずき

私は、広島に行くまで、戦争のことを、あまり深く考えたことがありませんでした。けれど、広島にいて戦争について考えてみると、あまりにも悲惨で、残酷で。改めて、戦争の恐ろしさや平和の大切さについて気づきました。そして、私は、戦争の恐ろしさを実際に肌で感じてみて思ったことや感じたことが2つあります。

1つ目は、戦争や原爆の恐ろしさです。

広島に落とされた原爆は、今から70年前の1945年8月6日、午前8時15分に上空600メートルで目もくらむような光を放って爆発し、秒速440メートルのものすごい爆風、そして、最大直径280メートルで5000℃という、ものすごく高温の熱線を放ちながら、広島を街を一瞬にして破壊しました。私は、この話を初めて聞いたときは、どのようなことなのか、あまり想像できませんでした。けれど、それについての映像をみると、その映像は、凄

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

まじいものでした。たくさんの建物は押しつぶされ、たくさんの人の命をうばいました。こうした原爆が日本に落とされたのは、アメリカが、原爆の効果を確かめるためにおとしたと言われていました。

けれど、このような恐ろしい核兵器がつくられたのは、戦争があったからだと思います。

もし、戦争がなかったら、核兵器などの恐ろしいものは開発されなかったろうし、日本も、アメリカの実験として扱われることもなかったと思うので、そう考えると、戦争とは、やはり今後おこしてはいけないことだと思いました。

2つ目は、平和とは何か、ということです。

平和、という言葉は、口にするだけなら簡単なことかもしれませんが、ですが、考えてみると、平和は決して簡単なことではありません。けれど、私はだからこそ、この原爆が落とされたという悲惨な出来事を多くの人に知ってほしいと思いました。それは、戦争をおこすと、どのようなことがおこってしまうのか、平和とは一体なんなのか、ということを一人生が考えなおす必要があると思ったからです。私が、このようなことを考えたのは、被爆した方のお話の中で、人間と人間の心のふれあいが平和の原点ではないか、とお話しされていて、それは、今も昔もかわらずに受け継がれていることかもしれないと思ったからです。人と人が心をふれあわせることで、お互いに争いのない仲の良い社会がつけられるのではないか、そして、それこそが平和の原点ではないか、と私も思いました。

最後に、私が広島に行って学んだことは、もう2度と戦争をしてはいけない、ということです。

戦争を繰り返せば、昔と同じようにたくさんの人の命がうばわれ、たくさんの街が破壊されていきます。なので、一人ひとりが戦争の恐ろしさを理解し、平和を大切にすることが、戦争を繰り返さないために、私達人間ができることだと思います。そして、日本だけではなく、世界に広めることで世界から核兵器や戦争がなくなってこそ、一番の平和だと思います。

派遣を通して考えたこと

湖北中学校 2年 清水 嶺

僕が今回我孫子市中学生広島派遣団に参加した理由は、原爆について何があったのか興味があったからです。70年前、広島で何が起こったのか、何故原爆という核兵器が作られ、落とされなければならなかったのか、原爆が落とされた後どのようにして今のような広島へと発展していったのかを知りたかったからです。

派遣の中で印象に残ったことは、広島平和記念資料館、本川小学校の見学と、平和記念公園内にある平和の灯の分火の2つです。

まず、広島平和記念資料館についてです。

資料館では、原爆の被害や被爆者の体験談、原爆が落とされた後の復興のことが等を知ることができました。展示の中で心に残ったことは、「平和への歩み」という箇所です。この場所には、原爆の熱線や爆風で被爆をした人や怪我をした人の看護をしている写真が沢山ありました。原爆が落とされた後、国内や海外から多くの医師団体が、当時不足していた薬を持って救援に来ました。それにより助かった人も少なくありません。これを見て、僕は命を救うためには国境も戦争も関係ないということを感じました。また、焼け野原になってしまった広島を、もう一度立て直そうとして復興に尽力した人の中には、県外や海外の人も多く、そうした人々の努力によって今の世の中が成り立っていることにとても感動しました。

次に本川小学校についてです。

本川小学校は、爆心地から350メートルの位置で被爆しました。そのため、熱線や爆風により多くの被害を受けました。ほとんどがなくなった校舎や、歪んだ扉の枠等があり、とても生々しかったです。その中で印象に残っているものは、終戦後物資が不足していた日本にアメリカからボールが送られてきて、お礼に小学校の生徒がアメリカへ送った絵や習字の作品です。これには、それぞれの想いがよく表れていると思いました。絵では丘の上で話している人達が描かれていたり、雨が降っていて傘をさしている風景が描かれていたりしていまし

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

た。習字では「桜の國日本」や「米国のお友達」等がありました。これを見て感じたことは、戦争の悲惨さです。戦争では国民ならば老若男女問わず参加させられました。どんなに勉強したくても、遊びたくても、その願いが叶うことはありませんでした。広島でも、建物疎開のために多くの子供が動員されて、8月6日の朝、作業中に原爆で亡くなった人が多かったのです。僕は、こんな事が二度とあってはならないと思います。本当は無関係のはずの人たちまで犠牲になってしまうような過ちをこれから繰り返さないために、過去の教訓を忘れないようにする必要があります。

そして、平和の灯の分火についてです。

僕は今回、トーチに火をつける役で、平和首長会議の分火事業として分火するのは我孫子市が全国初だったので緊張しましたが、しっかりできたので良かったです。分火を通して感じたことは、平和の灯の重要性です。平和の灯とは、この世界から核兵器がなくなるまで燃やし続けるという誓いの火で、今まで一時も火が消えたことはありません。しかし、あの火は必ず消さなくてはならないのです。僕は自分が生きている間に火を消すことができるように、核兵器廃絶に向けた活動をもっと広めていけるようにしたいです。そして、今も世界中に核兵器が存在していて、一度でも核戦争が起きたら人類が危機に陥る可能性があるということを、一人でも多くの人に知ってもらえるようにしていこうと考えています。

今回の広島派遣を通して考えたことは、2つあります。

1つ目は、「現在も残る世界の危機」です。今も世界のどこかで戦争は起きています。それは、なくてもいいものなのです。話し合ったり、譲り合ったりすることで未然に防ぐこともできるはずなのです。しかし、それでも起こってしまうことはあります。そして、それを止めることもできていません。核兵器も世界中に、数万発残っています。今人類は大きな選択を迫られています。そして、選択肢はいくつもあります。核兵器で強い国が弱い国を支配するか、核兵器を廃絶して話をするか、今のままの状態を続けていけるのか……。それを決めるのは僕たちだと思います。

2つ目は、「復興に尽力する人の存在と活動」です。終戦後、国民が一丸とな

って復興に尽力しました。そして、70年は草木も生えないといわれていた広島が今では緑あふれる豊かな街になりました。しかし、今でも原爆の後障害^{こうしょうがい}で苦しんでいる人も多く、問題が多く残っています。人の心の傷が癒えることはありません。しかし、傷を負わないようにすることはできます。もう二度と70年前の悲劇を起こさないようにするために、一人ひとりが考える必要があります。最後に、今回の広島派遣活動へご協力いただき有難うございました。

広島派遣を通して

湖北中学校 2年 須藤 慈英

僕は、8月5日から7日に、我孫子市中学生広島派遣団の一員として、広島へ行ってきました。

1日目のヒロシマ青少年平和の集いでワークショップがあり、テーマは「伝えていくこと」でした。そして、どうやって原爆を後世に伝えていくか話しあい、僕のグループでは2つの案が出ました。

1つ目は、タイムカプセルです。タイムカプセルを埋めて、何年か後に行事として掘り出します。その中には、原爆に関する資料と、それを読んだ埋めた人がどう思ったかを書いたノートが入っていて、掘ったら両方よんで自分の思ったことをノートに書いてまた埋めるというものです。

2つ目はゲームにするということです。そうした理由は、勉強などがきらいでも、RPG（ロールプレイングゲーム）風にしたりすれば興味を持って原爆について学べると思ったからです。

色々な意見の人と話すことができ、貴重な体験でした。

2日目の昼食のあとに原爆ドーム前で、佐々木祐滋さんに会い、歌「INO RI」を聞きました。佐々木祐滋さんは禎子の折り鶴で有名な佐々木禎子さんの甥にあたる人です。この歌をきいて、禎子の「生きたい」という思いが伝わってきました。これは原爆で犠牲になった人達みんなの想いだと思いました。

我孫子市にも禎子さんが折った折り鶴を持って12月に来るそうです。

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

3日目の平和記念公園の見学では、ガイドさんと一緒に回りました。公園内にはたくさんの噴水などの水がありました。その中に一つだけ浄水が出るものがありました。ガイドさんはこれは手を洗うものでも、私達が飲むものでもないと言っていました。原爆で亡くなった人の多くは水が欲しいと言いましたが、近くの人には、今は水にも毒があるだろうからと言って与えませんでした。どちらにしろ亡くなるんだったら、あの時の水を飲ませてやれば良かったと後悔の想いで、浄水が設置されており、これは献水と呼ばれています。

僕がこの3日間で体験したものは、とても衝撃的でなかなか言葉にはできません。このすべてが70年前に本当にこの場所で起きた事とは信じられません。もしその場所に居たら、また僕の大切な人達だったらと考えると核兵器は絶対に根絶しなければならないと思いました。

しかし、今なおアメリカには核兵器が太平洋戦争を終結させたと考える人達がいると言います。しかし、核兵器はその時限りではありません。被爆した人達を苦しめ、大地をけがし、被爆2世、差別や偏見でも人々を苦しめつづけます。

家に帰って小学5年生の妹に原爆の話をしようとする、嫌そうな顔をしました。なぜか聞いたら、「怖いから」と言いました。僕も今回の派遣が決まる前は怖くて自分から積極的に原爆などについて知ろうとはしませんでした。しかし今回の派遣を通して、怖くても正しく知り、伝える事が、原爆をなくし、平和を守るために必要であると強く感じました。妹がもう少し大きくなったら、また原爆の話をしてみようと思いました。

平和について思った事

湖北中学校 3年 早坂 旭慈

私は小学校4年生の頃、家族と一緒に一度広島に行ったことがあります。その第1の目的は、平和記念式典に参加し、平和記念資料館などを見学することでした。また、今回再び広島を訪れる機会をいただき、以前より一層深く平和

の事について考えるようになったと思います。平和記念式典では、平和記念公園を埋め尽くす数多くの参加者がいました。私達のような小中学生もいましたが、多くは年配の方達でした。8月の一年で最も暑い時期に開催されるこの式典では、私も暑さに耐えることが大変でしたが、他にも体調を崩す方が多いのではないかと心配になりました。

資料館では原爆によって一瞬のうちに焼死された方の写真や、皮膚が焼けただれ行くあてもなく呆然とする方々の写真、誰かが着ていた洋服、焼け焦げた三輪車など、全てのものを燃やし尽くしました。それを見て私はすごく怖いと感じました。それに、被爆再現人形や2歳の時に被爆し、白血病の発病で12歳で亡くなった佐々木禎子さんに関する資料など、たくさんの資料が展示されていました。一発の原爆「ピカドン」によって、一瞬にして全てが無くなってしまいました。またこんなに暑い日に原爆の熱風を浴びた方々の苦痛を考えると胸がとても痛く悲しくなりました。

今回の派遣で広島に行く前にけやきプラザで上映された「ひろしま」という映画を見ました。内容は私には少し難しかったですが、広島 of 悲惨な現状を見て、戦争は絶対にしてはいけないものだと感じました。特に印象的だったのは、やけどを負った方達が暑さとのどの渴きに耐えきれず、太田川に入り多くの方がそこで亡くなられたという事です。本当に恐ろしい光景だと思いました。

今回平和のつどいに参加し、さまざまな県から参加した中学生が混じりあって班をつくり交流しながら、広島 of 悲惨さをどのように未来に伝えていくかをテーマに、班ごとに意見を出し合いました。私達の班では、マンガ、ラジオ、本、テレビアニメなどの方法が良いとの意見になりました。それは、小中学生だけでなく、いろいろな世代の方達へ簡単にわかりやすく伝えられると考えたからです。このようにいろいろな人達が平和について考えて話し合う事によって、自分だけでは気付かないような意見もあり参考になりました。多くの世界の人々が話し合い意見を出し合って知恵を出す事によって平和な世界が築けるのではないかと思います。

ここで、原爆のような恐ろしい爆弾をアメリカはなぜ使用したのか。それは、アメリカが原爆を使うことによってこの戦争を終わらせる事ができると考えた

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

からとされています。あるテレビでは、原子爆弾の実験の為との意見もあるようです。理由はいろいろあると思いますが、長さ3m、直径0.7m、ウラン235を50kgも積んだ原爆を投下する事によって年末までに約20万人もの命が失われました。今、世界のあちこちで戦争が起きていますが、何とかやめさせる方法がないのか悩んでしまいます。平和記念公園の「原爆の子の像」の後ろに掛けられているたくさんの千羽鶴の願いを世界に届けたいと思います。

そのためには、今回の広島での経験や学んだ事を生かしたいと思います。記念式典で献花をし、「平和で暮らしています。そして安らかに眠って下さい」と祈った事。原爆の子の像が作られたことを理解できた事。千羽鶴を折り奉納したこと。今にもくずれそうな原爆ドームの現状を見たこと。本川小学校を見学したこと。佐々木祐滋さんの歌を聞いたこと。とうろう流しで「核兵器のない平和な暮らしができますように」と祈願したこと。語り部の方からの「戦争はしちゃいけないんです。どんな理由でも、どんな方法でも、人が人を殺しちゃいけないんです。なんのための言葉を持ち、なんのために心を持っているのか。人間であるかぎり、戦争は避けられるはずのものだと信じています。」という言葉伝えるなど、本当に多くの事を体験し学びました。この経験を生かして、今後も平和について考え伝えていきたいと思います。今回私達も広島から「平和の灯」を頂きました。我孫子市手賀沼公園にある平和記念碑の隣に点火する予定です。この灯を大切にし、いつか戦争がなくなり消火できる日まで心から祈っています。

今私にできる平和とはどのように作っていけるかは、まず、自分の回りにいる人への思いやりや、人に優しく接すること、そして兄弟喧嘩もなく、親孝行をすること、みんなが私と一緒にいる時、笑顔でいられることからしていきたいです。そして今回の経験を生かしてもっと友達に平和の大切さを伝えていきたいです。私はこの時代に生まれて本当に幸せと思いました。今年被爆70周年の節目に、我孫子市中学生広島派遣団の一員として光栄だと思います。ありがとうございました。

平和について

湖北中学校 2年 柴田 光音

私は、戦争や核兵器がいけないものだという事は知っていましたが、詳しいことは調べたりする機会もなかったのであまり知りませんでした。

今回、広島派遣に行かせていただき、今まで注目しなかったことや、知らなかったことをたくさん学びました。私が派遣に行って、思ったことや感じたことは4つあります。

1つ目は、平和はたくさんの人の願いということです。2日目に参加した平和記念式典には、国や年齢を問わずたくさんの方々が参加していました。それはやはり、平和を願い、もう2度とあのようなことをしてはいけないということを考えているから人が集まるのだと思いました。

2つ目は、被爆して遺族の方が亡くなった方などは平和を願っていますが、原爆に関する建物は取り壊してほしいと思っていることです。被爆者の方の話や、講師の方の話で戦争のこと、原爆での被害のことを思い出したくないから、原爆に関する建物を取り壊してほしいという声が増えているという話がありました。最初にそれをきいた時は、二度としてはいけないことだと見て感じる事ができるので取り壊さない方が良いと思っていました。しかし、派遣を通して原爆の恐ろしさや人々の悲しみを知り、原爆で被害を受けた人やそのご遺族の方が戦争、原爆の事を思い出したくないというのがわかってきました。

3つ目は、たくさんの人がこの先戦争が起きないように、若い世代の人に話を引き継いでいこうとしているということです。現在、被爆した方の中でお話をして下さる方はとても少ないと思います。しかし、自分が被爆していなくても被爆者の方からお話をきいたり、たくさん勉強してお話しして下さる方は、とてもたくさんいると思います。平和を願い、戦争が起きないように頑張っている人も多いので、私たちも次の世代に引き継いでいき、戦争がない世の中にしていきたいです。

4つ目は、平和のための建物が広島にはとても多いということです。私は最初、原爆ドームと平和記念資料館などしか知りませんでした。広島派遣に行

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

って小学校の一部が資料館になっている本川小学校平和資料館や、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館などの建物を知りました。建物の他にもヒロシマ青少年平和の集いがあったり、平和記念公園があったりと、広島には平和に関する場所がとても多いと感じました。それは、広島だけでなく、国が平和を願ってこそたくさんの建物やイベントがつくられていると思うので、これから先も一部の人だけではなく、国中の人々が参加できるイベントをつくったり、広島だけでなく他の場所にも平和に関する建物をつくって国の人全員が平和について考えることができるようになっていけば良いのではないかと思います。

今回広島派遣に行かせていただいて、本当にたくさんのことを学びました。そして、その学んだ中から自分なりに平和について考えたり、戦争や原爆の恐ろしさを見たり聞いたりして感じることができました。私は平和は、この先もずっと続けなくてはいけないもので、そしてこれからもたくさんの人に伝えていかなければならないものだと思います。戦争は、どんな理由があっても本当にやってはいけないものだと思うし、日本だけが戦争をしないのが平和ということではないと思うから、今、戦争をしている国や戦争をしようとしている国にも、戦争は大勢の犠牲者を出し戦うつもりのない人々も巻き込む危険なことだと知ってもらい、戦争をしている国は戦争を終わらせ、戦争をしようとしている国は戦争をしないで、世界中の人々が平和に暮らせると良いと思います。そのために、被爆国である日本が世界中に話をして核兵器をなくすための活動、呼びかけをしていければ良いと思います。そして、今私たちができるのは近くの人に伝えていくことだと思うので、自分ができる精一杯で、平和に少しでも近づけられたらと思います。

戦争を身近に考えよう

布佐中学校 2年 藤井 翔太

ぼくは広島派遣の前まで戦争を身近に感じていなく、「昔の話」で終わっていました。しかし、今回の派遣で戦争を「今自分が立っている地で起こった事だ」

と身近に感じ、普段も戦争について考えるようになりました。

身近に感じるようになった一番のきっかけは『ヒロシマ青少年平和の集い』です。宇佐川弘子さんや寺本貴司さんのお話の中で、原爆での影響も大きかったが、その後に残った障害でも苦しんでいたことを知りました。また、今も後^{こう}障害^{しょうがい}に苦しんでいることを考えると原爆を身近に感じました。ワークショップでは、自分達で「どのように伝えていくか」をテーマに考えたので、自分達のやらなければいけないことを感じ、原爆をかなり身近に感じました。派遣前に決意していたように、自分達が一番やらなければいけないのは「伝える」ことだと思うので、それについて深く考えられたので、全校に伝える時や、市民の皆様^{みなさま}に伝える時の一歩になったと思います。

平和記念式典では、安倍内閣総理大臣をはじめとする多くのあいさつで、日本だけでなく世界へもどのような影響だったのかが伝わってきました。平和記念公園内には外国の記者とみられる人もいました。こども代表の言葉では、将来、日本の担う自分達が戦争をよく知り、考えなければいけないということを深く深く実感しました。今後の日本は子供にも託されていることを、これから、しっかり心に留めたいと思います。

平和の灯の分火では、今まで51年間燃え続けてきた灯を、平和首長会議の分火事業の第1号として分火し、我孫子に持って帰りました。我孫子と広島がより近くなり、深い繋がりをもてたと思います。また、我孫子での点火では、自分も点火をするので、これは一生の思い出となると思います。こういった面でも、原爆のことを身近に感じる事ができたのだと思います。

さらに、原爆の子の像で折り鶴を奉納し、白血病で苦しんだ佐々木禎子さんのことを考え、また、同じように思って折り鶴を奉納している人が大勢いることを知りました。他にもたくさんを知り、学び、考えました。本川小学校では、現実とは思えない話を聞き、原爆で罪のない人が苦しんだことを改めて理解しました。広島平和記念資料館では、実物が恐ろしさを語っていました。最後の「75年は草木も生えない」はずのヒロシマに植物が生えた話を聞いて、これが復興への「芽生え」ではなかったのかなと感動しました。平和記念公園や国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の見学では、献水（水がなく苦しんだ被

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

害者に捧げる水)や『記念公園』の“記”の字の訳は、祈るのではなく「記憶」を意味するからだということ、原爆ドームの世界遺産登録についてなど、被害者に対する思いを戦後、形として残していることを知り、感動しました。

今年、被害者生存の平均年齢が初めて80歳を超えた中、後世に詳しく伝えていこうと様々な取り組みが行われています。私達は伝えられたことを記憶し、また後世へと伝えていかなければいけません。私はとうろう流しで「戦争を他人事と考えないこと！」と書き、流しました。戦争を経験していない人達が戦争を「身近」に感じ、将来、日本は二度と戦争をおこしてはいけません。派遣に行ってから、私も普段の生活の中で、戦争、原子爆弾のことを考えるようになりました。被害国である日本から、国民全員が原爆、戦争を身近に考え、世界から核をなくさなければいけないと、私は考えます。

原爆、戦争を「身近」に感じる事が大切なのです。

平和について思うこと

布佐中学校 2年 大河原 良祐

私が、今回の広島で平和について思ったこととは、地球上から核兵器はなくすべきだと思いました。

なぜそのように思ったかという、ガイドの方や広島市民の人たちが核兵器は作ってはならないという熱い思いが伝わってきたからです。

それに、私も原爆の実験の映像を見てこんなおそろしい物が地球上にまだあるということに、とても衝撃を受けました。核兵器は地球上からすべてなくしたほうが良いと思いました。

そして、地球上から核兵器をなくしていけば、広島におこったことなどが二度とおこらなくなっていく、世界中はどんどん平和になっていくと思いました。

そのため、平和について思うこと1つ目は核兵器をなくすということでした。

次に、私が平和について思ったことは、世界中の人々が、安心して生活できるようにになれば、平和になったと言えると思います。

世界中の人々が平和に暮らすためには、やっぱり、核兵器を世界中からなくしていけばいいと思います。

核兵器があるかぎり、いつ、どこに落とされるかわからないので、核兵器のおそろしさを知っている人々は、安心して生活ができないと思います。

核兵器のおそろしさをわかってもらえば、今、核兵器を持っている国も核兵器をなくしてくれると思います。

私は核兵器の実験映像を見て、核兵器のおそろしさをとても感じました。

核兵器を持っている国に、自分の国の核兵器のおそろしさを感じてもらえばいいと思います。

そうして、核兵器を持っている国々をどんどん減らして行って世界中の人々が安心して生活をしていけるようにして行ってほしいと思います。

これが私の平和について思うことです。

小さな思い、大きな平和

布佐中学校 3年 竹内 梨紗

70年前の戦争で、日本にもたくさんの人を失いました。私が広島に行って学んできた原爆で無差別に殺された人、軍隊として戦い殺された人、食糧不足で餓死した人、他にも空襲、沖縄戦など、多くの人が戦争によって亡くなりました。また、戦争は体にも心にも深い傷をつけました。そんな傷は、消えることなく現在まで残っている人もいますと知りました。

私が二度の広島派遣で学んできたことは、本当に恐ろしく、残酷で、同じ人間がこのようなことをしたのが信じられません。特に印象に残っていることは、広島派遣で訪れた本川小学校でのことです。ガイドをくださった岩田さんがこのようなことをおっしゃっていました。

「原爆が投下された後の川で、中沢さんはえびを採っていました。そのえびは太っていて大きくて美味しかったそうです。しかし、よく考えると、そのえびは原爆で亡くなった人の遺体を食べて育っていました。これは完全なる共食

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

いです。人間が人間を食べたことになります。」

私はこのことを聞いて、本当に戦争、核兵器はあってはならないと感じました。人間の共食いをするほど恐ろしいことがあり、私もこのような経験はしたくありません。

他にも、広島派遣ではたくさんの方のことを学び、感じてきました。

ここまで書いてきたこと、広島で感じたこと、被爆者の方のお話を聞いて感じたことなどで、私なりに平和について考えました。

まず率直に、戦争は私たち人類が持っている大切なものを全て奪う、絶対にあってはいけないことだと思います。したいことを自由にできなくなり、その代わりに毎日毎日労働していた人もいます。家族の元を離れなければいけなかった子供たちもいます。そして戦争では、人を殺すことも、人が死ぬことも当たり前だと思っていた人もいます。戦争は人間の心までも変えてしまいます。目に見えるものも、目に見えないものも戦争は奪います。

特に原爆では、それが一瞬にして起こり、そのときだけではなく次の世代、その次の世代と被害が続きます。ものすごい温度の熱線や、凄まじい威力を持った爆風で亡くなった方、怪我をした方がいます。また、大量の放射線で病気になった方もいます。その時代に生まれていなかった人も苦しんでいます。それだけでなく、原爆を受けたことによって差別を受ける人も、結婚を拒否された人もいます。大切な人を失った悲しみ、生き残った罪悪感、それらは、何十年の月日がたっても消えません。

戦争がもたらす被害は非常に大きく、深いです。私はもう二度と戦争や核兵器で苦しむ人がいない世界をつくりたいと思っています。日本人の中には、広島・長崎に原爆が投下された日付を正しく言える人が少なくなっています。日本人として、戦争のこと、特に原爆のことを知っていかなければいけないと思います。少しでも過去に起こっていた悲惨な出来事を知れば、平和に対して強い意志を持てると思います。

そして、世界に発信していくべきです。世界中の人が戦争の恐ろしさを理解してほしいです。核保有国の人々には特に、ヒロシマ・ナガサキを知ってほしいです。核兵器で自衛する必要のない世界にするには、一人ひとりが戦争を知

らなくてははいけません。

また、戦争をなくすためには、認め合うことが大切だと思います。人間は一人ひとり、考えが違います。考えの違いは、特に喧嘩になり、暴力や嫌がらせで相手を傷つけます。そうなる前に、それぞれの考えを分り合い、認め合うことができれば、喧嘩はなくなります。自分の考えを押しついたり、感情的にならずに伝えることは大切です。

戦争は、国と国との喧嘩です。ですので、国同士でも考えを伝え合えば、戦争を防ぐことができるでしょう。

今、世界から戦争をなくすためにできることは、戦争や核兵器の恐ろしさを知ること、異なる考えの人を分り合うこと、自分の考えや戦争についてを後世に伝えていくことです。他人事ではありません。一人ひとりがこれらのこと、これらのこと以外でも平和のためにできることを行動することが、平和な世界を築くことにつながります。小さな平和に対する思いでも、何万、何億と集まれば大きな平和をつくれます。一人ひとりが平和への思いを胸に、行動していきましょう。

原爆の真実を知って

布佐中学校 2年 伊藤 汐里

私が今回の広島派遣で最も強く感じたことは、ひとつひとつの命の重さです。今まで私は、原爆による死者は14万人という数字だけを見て、ものすごい数字だから原爆は怖いなと思っていました。しかし、実際に被爆体験者の方々のお話を聞いたり、資料館などで写真や映像、被爆した日用品などを見ていくと、その14万人のひとりひとりに様々な生活があり、家族や友達がいることがわかりました。戦時中のため、中学生が工場で働いていたり、小学生が建物疎開の作業をしていたりと苦しい生活でしたが、原爆が投下される直前まで、広島町にはたしかにたくさんの命が存在していたのです。それが一発の原子爆弾で全て焼き尽くされてしまいました。何もわからずに一瞬にして亡くなった方

第2部 我孫子市の平和事業

1. 継続事業

や、やけどでもがき苦しみながら亡くなった方など多くの方が亡くなりました。原爆で最も恐れるべき放射線は、やけどなどよりも多くの人を苦しめています。原爆病で苦しむ人は今でもたくさんいるのです。このような事実を知ると、原爆は本当に存在してはならないものだと改めて強く思いました。このようなひどい歴史を二度とくり返してはいけません。

二度とくり返さないためには、より多くの方が広島・長崎での悲劇を知るべきではないでしょうか。日本は世界で唯一の被爆国であるため、核兵器廃絶を世界へ訴える義務があると多くの方は言います。本当に日本人は全員世界に訴えることができるでしょうか。私はそうは思いません。なぜなら日本人も原爆について全くと言っていいほど知らないからです。若い人の中では、原爆が投下された日が何月何日か知らない人が増えてきているそうです。戦争の時代を生きてきた人も高齢化が進み、このままではいずれ、戦争・原爆について知る人がいなくなってしまう。そうならないためにどうすれば良いかを「ヒロシマ青少年平和の集い」というところで話し合いました。その結果、インターネットやゲームなどの若い人向けのものから、絵や音楽などの印象に残りやすいものまで、様々な方法ができました。その中でも私が一番意味があると思ったのは、学ぶ場を作ったり、平和について考える時間を増やすということです。興味がない人でも参加するうちに考えるようになっていくと思います。原爆の記憶がなくならないようにするためには、次世代を担う私達中学生が率先して動くことが何よりも重要なのです。私はまず今回の体験を学校で発表し、原爆の恐ろしさを知ってもらい、平和とは何かをより多くの方が考えるようになってほしいと考えています。そして、校内だけでなく、小学校でも発表する機会があるようなので、そういったことにも積極的に参加していき、戦争がなぜいけないのかをより多くの人に理解してもらいたいです。

もうひとつ、広島に行って感じた事があります。それは、原爆は過去のことではないということです。世界にはまだ、たくさんの核兵器が存在しています。今まで私は、核兵器や核実験といった、名前だけは知っていましたが、どんなものなのかはよくわかっていませんでした。今回初めて原爆と核兵器が同じもの、もしくはそれ以上のとんでもない兵器だとわかり、怖くなりました。今日

本の内閣は、安保法案という戦争に参加できるようにしてしまう法案をとおそうとしています。この法案が可決されてしまったら、戦争や核兵器は決して他人事ではなくなります。日本で同じ悲劇を二度とくり返さないためにもこの法案には反対です。世間には、日本が他の国に守られているだけではないといけないという意見もありますが、私はそうではないと思いました。戦争は人の考え方をおかしくします。誰も幸せになる人はいません。不幸になっていくだけです。日本が戦争をしない、核兵器には絶対反対であるという信念を持ち続け、戦争は平和な社会には必要ないものだという考えを世界に広げられる存在になるべきなのではないでしょうか。

中学生の私達ができることは限られています。しかし、何もできないということはありません。私達派遣団には義務があると市長はおっしゃいました。そのとおりです。私達は原爆の記憶が消えないように伝えていく義務があります。ですので、私は、原爆の悲惨さを伝えると同時に、今の生活がどれだけ平和であるかを、そして原爆の脅威は思っているより身近にあることを忘れないでほしいと訴えていきます。今では家族がいて友達がいて、学校に行けて勉強ができる。そういったことはあたりまえです。でも昔は違いました。日常のありがたさを一度考えてみてください。本当の平和とは何か見えてくるはずですが、安保法案は私達の平和がなくなるかもしれない危険な法案です。絶対反対です。戦争と核兵器のない世界を実現させたいです。